

チャンドラキールティと帰謬論法

伊 藤 淨 蔵

インド中期中観学派は清弁 (Bhāvaviveka) が仏護 (Buddhapālita) を批判したのを契機として、周知のごとく Svāntarika と Prasāṅgika との二派に分裂した。前者は清弁の学系で、自立の論証式 (svatantra-prayoga-vākya) を用いて中観哲学を闡明なうめた。後者は仏護・月称 (Candrakīrti) の学系で、専ら帰謬論法 (prasaṅga-vākya) によって敵者の主張に過誤の付随することを指摘し、その主張の不成立を論証した。

以下本稿では、月称の Prasāṅgika 第一章第一偈の自生批判に対する註釈を中心に、彼の帰謬論法を考察したい。論の構成に従って、①仏護の自生批判、②清弁の仏護説批判、③月称の清弁説批判と仏護説救釈の順序で原文を示す。

① 仏護の自生批判説

na svata utpadyante bhāvaḥ, tadutpādavaiyarthyāt, atiprasaṅgadośācca/ na hi svātmanā vīdyamānānām padārthanām punarutpāde prayojanamasti/ atha sannapi jāyeta itī//
(¹)

② 清弁の仏護説批判

tadayuktam, a. hetuḥśāntānabhidhānāt, b. paroḥtadośāparihāṭṭce/ c. prasaṅgavākyaivācca prakārtārvaviparyayeṇa vi-

paritārtasādhyataddharmavyaktam paramādutpennabhāva-janmasāphalyāt, janmanirodhācceti kīrtānavirodhaḥ syāt//
(²)

③ 月称の清弁説批判（清弁の批判にたいする答釈）

prasaṅgaviparītena cārthena parasyaiva sambandho, nāsmākam svapratīñāyā abhāvāt/ tataśca siddhāntavirodhāśambhavaḥ, parasya ca yāvadbahavo dośāḥ prasaṅgaviparītāpattyaḥpadante tāvadasmābhirabhiśyata eveti/nīḥsvabhāvabhāvāvadīnā svasvabhāvabhāvāvadīnaḥ prasaṅga āpadyamāne kutaḥ prasaṅgaviparītāthaprasaṅgiṭā/ na hi śābda dāṇḍapāśikā iva vakātāramasvatantrayanti, kiṃ tārhi satyām śaktau vakturvivakṣāmanuvīdhiyante/ tataśca parapratīñāpatisēdhamātraphalavātiprasaṅgāpādanasya nāsti prasaṅgaviparītāthāpatih/atha syādvīritikāṇāmeṣa nyāyo yauprayogavākyaivistarabhidhānaṃ kartavyamiti// etadapi nāsti, vighravayāvartanyā vīritiṃ kurvātāpyācāryeṇa prayogavākyanabhidhānāt// api cātmanastarkaśāstrīkaśaśalamātramāviscikīrṣayā aṅgīkṛtmanadhyamakadāśanasyāpi yatsvatantraprayogavākyaḥbhidhānaṃ tadatīrātmanekadośasamudāyāspadamasya tārīkasyopalakṣyate//
(³)

ここで、清弁は帰謬論法で自生を否定すれば、他生という矛盾概念が肯定せられ、中観哲学の決定説である四不生と矛盾する批判する。これに対し、月称は、中観論者が自己主張の命題はな。帰謬論法はただ敵者の主張を否定せんがためであって、自己主張を間接的に肯定するという意図をもつものでない、という。それ故、自生の否定は決定説と矛盾しないとする。また清弁による中観哲学は三文作法を用いた定言的推理によつて説示されねばなら

ない。然るに、月称はかかる論証式を不必要とし、専ら帰謬論法を用いる。その故は、論証式を整えると、却つて敵者の反難を招く余地が生じ、論駁と反難との無限迴及に陥る可能性があるからである。清弁は仏教論理学に精通し、帰謬論法の限界を熟知していた。仮言的な帰謬論法は定言的推理の間接論証の場合にのみ有効である。従つて、それは単独で用いられるならば、その論証は無意味なものとなる。そこで清弁は、元來帰謬論法に基づく竜樹 (Nāgārjuna) の哲学を定言的論式で表現することに努力した。そのため、陳那 (Dignāga) 以来の仏教論理学に存しない特殊条件を論式に付け加えることになった。一は、すべて主張命題には「勝義的には」(paramārthicas) という限定詞を付加すること。二は、すべての主張命題は否定命題であり、しかも、その否定は相対否定 (pariyudāsa-pratiseḍha) びなく、絶対否定 (prasajya-pratiseḍha) びあること。この絶対否定は否定の対象である事柄自体の否定に尽きるもので、矛盾関係にある反対命題の成立を意味しない。すなわち、論式上においては、大前提たる因の第二相の換質换位を許さない。従つて、清弁の論証式には因の第三相がない。

月称は敵者批判の方法としては、定言的論証は無用であると説く。中観論者の帰謬論法は、敵者の主張自体に内含する自己矛盾を指摘するだけである。すなわち、それはあくまでも自己主張の意図を矛したものでない。

naiva svata utpannā ityavahāryamāṇe parata utpannā ityānīṣṭam 'prāpnoti/ na prāpnoti, prasajyapratiseḍhasya vivakṣitaivāt parato 'pyutpādasya 'pratiśeṣyamānāvatī//⁽⁹⁾

これは自生の否定は他生を肯定するという反難に応えたものび、

チャンドラキールティと帰謬論法 (伊 藤)

月称にとつては肯定すべき主張命題はない。自生の否定は他生の否定を同時に含意している。

かようにして、同じく prasajya-pratiseḍha という言葉を用いても、清弁と月称とでは、その否定の方法論上に大なる相違が認められる。清弁にとつて、それは絶対的な否定命題で表わす自己主張を可能ならしめるための論理的必須要件である。ところが、月称にとつては「結び付けられるものの排除否定」という言葉通り、まさに相対を絶する絶対否定の意味である。一般的にいって、ある概念の否定はそれに相対する矛盾概念の肯定を前提とするが、ここではその矛盾概念を認めるものでないことを明示するために言われている。従つて、矛盾概念を同時に否定する絶対否定は論理的に証明できる性質のものではない。概念自体は常に相対的なものであるから。このように、清弁の絶対否定は論理的であり、月称のそれは直截的である。

以上要するに、月称の立場では、中観論者にとつて主張命題は存しないから、敵者の主張を批判する方法も論式によらず、帰謬論法によらなければならないという。そして、帰謬論法による否定は、相対を否定する絶対否定であると明言する。しかも、それによつて彼は空の哲学は論理の場を超越したものであることを示そうとしたのである。

1. Prasannapada, ed. by L. de la Vallée Poussin を使用。

2. p. 14, ll. 1~3. 3. p. 14, l. 4~p. 15, l. 2. 4. 紙数制限のため a・b に対する月称の答釈は省略。5. p. 23, l. 3~p. 25, l. 9. 6. p. 15, l. 3~p. 18, l. 4. 参照。7. p. 25, l. 9. 月称の批判文は p. 25, l. 9~p. 28, l. 3. 8. p. 13, ll. 4~6.